The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	夢書の受容に関する一考察 ： 『夢占逸旨』を例として
Author(s)	清水, 洋子
Citation	中国研究集刊. 2015, 60, p. 107-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/58722
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中国研究集刊　称号（総六十号記念号）平成二十七年六月　一〇七―一二三頁

夢書の受容に関する一考察

―『夢占逸旨』を例として―

清水洋子

一、図書目録における夢書の歴史と『夢占逸旨』

南宋の洪邁は、占夢が古代より重視されてきたことを指摘した上で、「今人復た此の卜に留意せず、市井の妄術所在林の如しと雖も、亦た一箇も占夢を以て自ら名とする者無し。其の学殆ど絶ゆ」（『容齋随筆』続筆、「古人占夢」）と、占夢の衰退ぶりを伝えている。中国では古代より夢を占うという営みが脈々と受け継がれてきたにもかかわらず、宋代にあっては既に人々の興味関心が占夢から離れてしまっていた。となれば、その転機は一体どこにあったと考えられるのだろうか。

この点については、沈既済「枕中記」と李公佐「南柯太守伝」に対する齋藤喜代子氏の指摘が示唆に富む。この二作品は、人生の盛衰を夢の中でひととおり体験した主人公が、夢から醒めた後に人生のはかなさを頓悟するという、「人生の無常観」を主題とする。このことを踏まえつつ、齋藤氏は唐代の文学傾向として、「夢そのものに對する興味から夢物語への興味の移行」および「記述から創作への移行」を挙げ、上の二作品がその転換点になったと指摘する（注1）。氏が指摘するこの傾向は唐一代で消失することなく、それ以降、特に明代に入るとより鮮明な形で現れる。その最たるものが、戯曲作家の湯顕祖（一五五〇～一六一六）による「玉茗堂四夢」である。

湯顕祖は「実生活において夢に深い関心をもち、夢は

現実の予兆であり、また現実と一致するものであると堅く信じていた人」であった(注2)。「玉茗堂四夢」とは、「枕中記」、「南柯太守伝」に取材した『邯鄲夢』、『南柯夢』に、『還魂記』、『紫釵記』を加えた四作品をいう。幻想的でありながらも現実味を帯びて読者に迫るこれらの作品は、夢と現実とが巧妙に連続した物語世界を展開する。では、幻想文学という枠組みの中で夢が華やかに描かれる一方、占夢はどのような状況下にあったのか。

古代より人々の精神的営為を支えてきた占夢については、それを現実的な方策として活用する立場とそれほどの価値を見出さない立場とがありながら、占夢の需要自体はその後も絶えることがなかった(注3)。だがその様相は、読者を幻想的世界へと誘う「夢」ほどの熱気は帯びず、現世利益に直結する醒めたものであったと思われる。ところが、明代になるとその状況は一変し、占夢に関する大部な夢書が立て続けに登場する。

歴代の史書に見える図書目録を見る限り、夢書自体は一定の範囲で供給・継承されていたことが窺える(注4)。その多くは占辞が配列される「占夢書（〜占夢書）」、「解夢書（〜解夢書）」だが、その大半は散佚、もしくは敦煌文書残巻として僅かに現存するのみで、夢書間の関連性について知ることは困難なのが現状である。

しかし時代が変われば人々の生活はもちろん、興味関心の対象も変化するため、夢に現れる事物や占辞の内容も随時更新されていく(注5)。だが、明代においては好古の傾向も比較的関係してか古い占辞なども積極的に収集されており、大部な夢書が完成する一因となっている。では、こうした夢書はどれほど流通していたのか。以下、参考までに、明清の蔵書家による図書目録を見てみたい。

明代

○『趙定宇書目』
　夢占類考
　解夢書一本
　夢占外旨

○『文淵閣書目』巻十五
　夢書（一部一冊闕）
　解夢書

○『内板経書紀略』
　解夢書大全（二本七十葉）

○『行人司重刻書目』
　帰雲別集（二十本二巻）

○『晁氏宝文堂書目』

古今紀夢要覧（類書類）
解夢厭恠書（陰陽類）
○『国史経籍志』巻四下　子類五行家占夢
占夢書三巻　京房
又一巻　崔元
又三巻　周宣
又一巻　竭伽仙人
又四巻　盧重元
夢雋一巻　柳璨
解夢録一巻　僧紹端
夢占逸旨八巻　国朝陳士元

清代
○『文選楼蔵書記』
夢占類考十二巻　明張鳳翼輯。長洲人。刊本。是書紀古今夢兆。自天象至説夢、分類　三十有四。
○『蔵園訂補邵亭知見伝本書目』二　子部　術数類　雑技術之属
補　夢占類考十二巻（明張鳳翼撰）明万暦刊本。十行二十二字、黒口左右双闌。目後有「万暦乙酉孟夏信陽王氏梓行」一行。余蔵。四庫存目。
○『万巻精華楼蔵書記』巻八十五　術数類
夢林元解三十四巻（注6）　明何棟如撰　明本
○『鄭堂読書記』巻四十七
夢占逸旨六巻　芸海珠塵本
○『鄭堂読書記補逸』巻二十三
夢林元解三十四巻　明刊本亦陳士元撰、何棟如重輯。四庫全書存目、心叔既撰夢占逸旨八巻、已付之梓。復得円夢秘策一書、亦八巻。
○『平津館鑑蔵記書籍』
夢書　洪頤煊集本
○『天一閣書目』
夢兆要覧二巻
○『浙江採集遺書総録』
夢占類考十二巻　刊本
右明長洲張鳳翼輯。
夢兆要覧　刊本
右明礼部尚書鄱陽童軒撰。乃考列史伝所載夢験。
○『虞山銭遵王蔵書目録彙編』
夢書一巻
○『持静齋書目』
夢占逸旨八巻　帰雲別集刊本　明陳士元撰
○『千頃堂書目』巻十三
童軒夢徴録　鄱陽人　案遺書目作夢徴要覧二巻

張幹山古今応験異夢全書四巻　揚州衛指揮
陳士元夢占逸旨八巻
張鳳翼夢占類考十二巻
解夢心鏡五巻
古今纂要夢珍故事三巻
古今記夢要覧二巻
古今夢徴

以上の書目のうち、冒頭で述べた「大部な夢書」となるのが『夢林玄解』、『夢占類考』、『夢占逸旨』である（全て現存する）。これらの共通点として挙げられるのは、夢に関する事項もしくは夢に現れる事象を項目ごとに整理配列した、いわば類書的性格を持つ篇が見えることである。たとえば本稿で主に扱う『夢占逸旨』の場合、夢の生成論や占夢理論を説く内篇に対し、その副次的資料として類書的性格を持つ外篇が設けられている。

『夢占逸旨』の流通について、周亮工（一六一二～一六七二）の『因樹屋書影』によると、陳士元は著述の多いことでも知られるが、その自撰集『帰雲別集』、『外集』全篇の入手は困難であったという(注7)。また、「帰雲別集十種七十四巻外集十種六十七巻　明刊本」を蔵する葉徳輝（一八六四～一九二七）『郋園読書志』は、周亮工の言葉を踏まえて次のように述べる。

此れに拠れば、書は国初に在りて已に得ること易からず、今又た二百余年を歴し、更に希罕なり。此の集二三種を缺くと雖も、之を櫟園〔筆者注…周亮工の号〕の見るところと較ぶれば、実に完帙たり。道光癸巳に涙氏重刻す。但だ別集十種ありて外集なし。何の故かを知らず。……今先生の『論語類考』、『孟子雑記』は已に陳春の『湖海楼叢書』に刻入され、『夢占逸旨』、『江漢叢談』は已に呉省蘭『芸海珠塵』に刻入され、『名疑』は已に張海鵬『借月山房叢書』に刻入され、『易象鉤解』は已に銭熙祚『守山閣叢書』に刻入され、其の余他種は多く近日趙尚輔編む所の『湖北叢書』に刻入さる。近く六七十年、已に家に其の書あり。而るに旧刻を求むること此くの如きは、已に宣鑪・成窯の如し。鼎彝と並べて貴ぶと雖も可なり。是の書曾て南匯呉稷堂侍郎省蘭の蔵する所たり。前に印記あり(注8)。

葉徳輝所蔵の『帰雲別集』と『外集』には一部佚したものもあるが、周亮工所蔵のものに比べれば篇数も多かったという。周亮工の時代においては入手困難であっ

た陳士元の著作も、複数の叢書に刻入されてからは閲することも容易となり、『夢占逸旨』は呉省蘭『芸海珠塵』に収録されたことで広く読まれることになる。

陳士元は豊富な著述を残し、その内容も博覧堅実と評価される学者であった。字は心叔、号は養吾。正徳十一年（一五二八）応城に生まれ、嘉靖二十三年（一五四四）には進士に及第する。その後は灤州の知となるが、その官吏人生は数年後にして突如終わりを告げる。その理由について『因樹屋書影』は次のように記している。

先生攬揆の前一夕、夢に一老翁冠袍款戸して入り、自ら斉卿孟軻と称す。翌日にして心叔生まれ、其の父遂に字して孟卿と曰う。後に嘉靖甲辰の進士に登り、灤州に刺たり。己酉三月上丁、孔廟に事うることとあり、孟子に分献するも、木主故なくして自ら仆れ、型爵皆な地に堕つ。心叔之を悪み、遂に自ら免じて帰す。養吾子と称し、影を息めて読書す。故に著書甚だ富めり(注9)。

祭祀時に孟子の木主が倒れたことを気に病んだ末の致仕であったという。これには、父親が見た夢から自身は孟子の生まれ変わりであるという思いが少なからずあったこと、または「少くして跅弛、奇気を負う」（『東林党籍考』引く『光諸県志』）という鷹揚かつ気儘な、常人とは異なる気質が関わっていたのかもしれない(注10)。

この陳士元の『夢占逸旨』について、筆者はこれまで考察を進め、また内篇の訳注を作成するなど、その全貌解明に取り組んできたが(注11)、本書には版本の系統など未だ謎めいた部分も多い。

現在最も容易に閲覧できるのは、『芸海珠塵』所収本（嘉慶中南匯呉氏聴彝堂刊本。暫定的に「芸本」と呼ぶ）であり、『帰雲別集』所収本（道光十三年応城呉毓梅校刊同治十三年修補本。暫定的に「帰本」と呼ぶ）がこれに次ぐ。両種を比較すると、典拠の引用や書式にやや崩れたところが見える帰本に対し、芸本は比較的整っている。だが、芸本には帰本にない誤記も確認できるため、『夢占逸旨』の原初形態に近い版本を特定することは困難であった。しかし近年、筆者は明嘉靖年間刊本『夢占逸旨』（以下、暫定的に「明刊本」と呼ぶ）が台湾の中央研究院傅斯年図書館（以下、傅図）に現存することを偶然に知り実見調査を行った(注12)。その際、以下の三点について確認することができた。

（一）明刊本には陳毅という人物による題記が書き入

れられていること。

（二）明刊本の本文および注の内容は芸本とよく一致すること。

（三）『夢占逸旨』本文に付された注釈は、従来陳士元本人によるものとされていたが(注13)、明刊本では子の陳堦による注となっており、いわゆる「自注」は「他注」であったこと。

（一）の場合、題記の内容はもとより該書が台湾へ流出した経緯など興味深い。そして（二）では、芸本が『夢占逸旨』の原書形態に近い性格を持つ版本であることが明らかとなった。（三）については、どの段階で陳堦注が削除されたのかが問題となろう。そこで本稿では、今回新たに得た情報について考察し、『夢占逸旨』の周辺、とりわけ本書がどのような経緯で後世受容されるに至ったかという点にも迫りつつ、中国における夢文化の一側面について考えてみたい。

二、陳毅による題記

題記の筆者である陳毅（一八七三～?）は清末民初の学者、政治家、蔵書家である。その経歴の一部は『夢占逸旨』流伝の経緯に関わるため、以下簡単に触れておく。

陳毅、字は士可。湖北省漢陽府黄陂県に生まれる。湖北両湖書院（一八九三年に「自強学堂」、一九〇二年に「湖北方言学堂」と改称）に学び、中華民国期は北京政府の総統府秘書、蒙蔵事務局参事、蒙蔵院参事を歴任した。陳毅が注力した事業は、中国近代教育制度改革と対モンゴル政策である。

陳毅が学んだ湖北両湖書院は、洋務派官僚として知られる張之洞が両湖総督時に設立した学舎で、西洋の学問も積極的に取り入れていた(注14)。その後、両湖書院の助教となった陳毅は張之洞の命を受け、王国維らと共に日本の学制と教育事情の視察に向かっている。陳毅の日本滞在は一九〇一年十二月から二ヶ月ほどであったが(注15)、元朝史・辺疆史地にも関心を持つ陳毅は、視察の傍ら那珂通世ら東洋史の研究者とも交流を深めている(注16)。

清朝末期は西欧列強国の進出に伴う自国の分断と日清戦争の敗北により、国家体制の改革と国力強化を急務とする一部の進歩的知識人が奔走した時代であった。こうした時流の中で、一九〇三年、近代中国における教育改革の一環として制定された「奏定学堂章程」（癸卯学制）は、日本の学制と教育現場に範を取る中国近代教育制度

の基盤であり、その起草を担当したのが陳毅であった(注17)。

その後、陳毅は対モンゴル政策における折衝に従事する。この政策は、清朝崩壊後に蒙古王公らを中心に独立宣言したボグド・ハーン政権に対し、独立を容認しない構えの中華民国が執った強気な対蒙古政策である。一九一四年には、ボグド・ハーン政権がロシアと協定を結び独立の実現を画策する流れを受けてキャフタ会議が開かれた。外蒙内蒙の法的統治をめぐるこの会議では、中国宗主権のもとでの外蒙古の自治を容認するキャフタ協定が締結されたが、当時の蒙蔵院参事であった陳毅は、この会議で専使補佐を務めている(注18)。しかし、一九二一年に起こったモンゴル革命においてロシア白軍と連合した蒙古軍が庫倫(ウランバートル)を攻撃すると、防戦にあたった陳毅は敗北し、庫倫は陥落する。その後陳毅は職務を罷免されているが、以後の経緯は不明である(注19)。

以上が陳毅の略歴である。では、近代教育の推進に関わり、かつ西欧の学問に対する見識も備えた陳毅が記した『夢占逸旨』の題記にはいかなる内容が書かれていたのか。

吾が宗　帰雲先生は著述宏富、明代に在りては当に升庵と並駕すべし。此の『夢占逸旨』は特に其の余事なるのみ。占夢の術　迷信に近きと雖も、然るに神意の間に何を以てか此の幻象を生ずるは、亦た心理学を講ずる者の解決するを至難とするの疑問なり。此の書は徴攬宏博、研究の資に供すべきと信ず。暇ありて廠肆に游び、偶ま此の本を獲、故に其の旨趣を簡端に掲げて、以て学子に告ぐ。光緒丁未十月十六日、博士泉主陳毅　京寓槐幄軒に識す。此の書近くは惟だ『芸海珠塵』にのみ刻本あるも、此の本は嘉靖原刊にして、至って得難きと為す。読者当に之を宝惜すべし。毅又た記す。黄陂陳毅(注20)

「嘉靖原刊」という資料的価値にも触れつつ、その学術的意義についても指摘する。中でも占夢を「迷信に近」いとしながら、夢の発生に対する問題提起を行う記述は、清末から民国への移行期に西洋科学、とりわけ心理学との関わりからなされた、夢に対する再評価の一側面を知る上でも貴重である。ただし、陳毅の言う当時の「心理学」については注意を要する。

「心理学」が西周による訳語であることは周知の通りだが、これは現代における「心理学」とは異なる。現代における呼称は、十九世紀末から二十世紀初頭の近代教

育制度において開設された「実験心理学」を指す。日本では、海外で学んだ実験手法を伝えた元良勇次郎（一八五八～一九一二）ら専門家による後進の育成と研究の推進が行われ現在に至る。一方の中国は、日本人による心理学関連の著作や翻訳を通して西学としての心理学を輸入したが、「心理学」という用語がすぐさま実験心理学の意味で中国人に認知されたわけではない。

そもそも中国ではギリシア同様「心」に関する議論が古代から行われており、十七世紀には宣教師を経由する形で心についての学問（当時の神学的唯心論の色彩が強いもの）が流入していた(注21)。そうしたこともあってか、「心理学」という用語の含意は、実験心理学が本格的に定着するまで曖昧な状態にあり、東アジア諸国が西学を受容する中で、漸次その内容を変えながら各国の学問体系の中で定着したものである。日本では哲学と心理学とが混在する状況が七〇年代まで続いたが(注22)、両者の混在については中国でも同様で、論争を引き起こす契機にもなった。たとえば、一九〇二年に陳黻宸が心理学は哲学を包摂すべきとの認識を示した（『新世界学報』「叙例」）のに対し、梁啓超は次のような異論を唱えている。

日本人は英語の〝psychology〟を訳して心理学とし、〝philosophy〟を訳して哲学とした。両者の範囲は、はっきりと異なっている。我々の訳語を日本人に盲従させる必要はないとはいえ、日本人の訳語は、非常に工夫されており、欧文の語原ともよく符合しており、これを急に変えるのは容易ではない。…〝psychology〟と〝ethics〟（倫理学）はみな〝philosophy〟の一部である。哲学という分類を立てて、心理・倫理はみなこれに入れるのが適当であろう(注23)。（『新民叢報』第十八号、一九〇二年）

近代教育の基幹となる学問体系をいかに構築するかをめぐり、学問の分類に注力された当時の状況を伝える記述である。またこの内容は、「心理学」という用語が日本で作られた〝psychology〟の訳語であるとの認識が当時の中国にあったことも示している。

こうした状況を踏まえれば、『夢占逸旨』の題記が書かれた一九〇七年は日本で生まれた「心理学(psychology)」という訳語が中国にも定着していた頃である。だがその含意は、前近代的かつ哲学的意味が濃厚なものであったと考えられる。そして、陳毅が占夢を「迷信に近」いとしながらも、一方で夢という現象の発生に関心を持ち、これを当時の「心理学」分野における課題としたこと

は、夢や占夢が従来とは異なる新たな段階で思索され始めていたことを示唆していよう。

三、『夢占逸旨』の版本系統と明刊本流伝の経緯

上述の通り、『帰雲別集』と『外集』所収の著作は、他の叢書に刻入されてから流通するようになったという経緯がある。この点を踏まえつつ、本節では、以下『夢占逸旨』の主な版本について暫定的に整理しておきたい。

最初に刊行されたのは現在傅図に蔵されている「明刊本」、すなわち明嘉靖壬戌（一五六二）刊本である（以下、「①嘉靖本」とする）。その後、万暦癸未（一五八三）に『帰雲別集』が刊行されるが、ここにも『夢占逸旨』が収録されている（②万暦本）。その後、清の嘉慶年間には呉省蘭輯『芸海珠塵』に『夢占逸旨』が収録される。（上述の「芸本」。以下、「③嘉慶本」とする）。道光癸巳（一八三三）になると、『夢占逸旨』を収容する『帰雲別集』が重刻される。（上述の「帰本」。以下、「④道光本」とする）。

これら四種の版本について具体的に見てみると、①嘉靖本と②万暦本は陳士元自身によって刊行された初期の版本であり、②万暦本の本篇冒頭、「夢占逸旨巻々一内篇」の下に「帰雲別集二十六」とある以外の異同は見られないようである。そして字体なども細部にわたり酷似しているため、両者はおそらく同じ版木によるものと推測される。また、③嘉慶本も①嘉靖本とよく一致するため、①嘉靖本、②万暦本、③嘉慶本はおおよそ同系統の版本と考えられる。

一方、これらと系統を異にするのが④道光本である。その詳細については紙幅の都合上別稿に譲るが、書式の相違以外にも、一部本文と注釈（割注）が混同するなど粗雑な箇所も見える。これはおそらく、重刻時の誤刻もしくは意図的な改竄によるものと考えられる。以上のことから、『夢占逸旨』の版本はその原初形態を伝える嘉靖本系統と、そうではない道光本系統の二つに大別できると言えよう。

次に、①嘉靖本が傅図に所蔵されるまでの経緯ついて考えてみたい。筆者が確認したところ、嘉靖本には陳毅の蔵書印とは別に「東方文化事業総委員会所蔵図書印」が押印されている。東方文化事業とは、一九二三年に制定・公布された「対支文化事業特別法」のもとで推進された日中共同文化事業の総称である。一九一九年の五四運動等を背景に悪化した反日感情の沈静化を図るもので、日本はアメリカと同様、義和団賠償金（庚子賠款）

から支出する形で対華文化事業を立ち上げることとし、一九二五年には実施機関となる東方文化事業総委員会を北京に設立した(注24)。

東方文化事業の基本方針となる「汪・出淵協定」には、「三、北京に図書館及び人文科学研究所を設立する」という条目が記されている。これに従い、東方文化事業総委員会の直属機関として北京人文科学研究所が設置され、図書館設立のための東方文化図書館籌備処も開設された。しかし、その後は図書館設立よりも四庫全書の続修となる書籍の提要執筆を優先したことで、収集の対象も提要執筆に必要な書籍に限られることになる(注25)。

書籍の購入が行われた期間は一九二五年から一九三四年の九年間であり(注26)、一九三八年には図書館籌備処蔵書の書目を載せた『北京人文科学研究所蔵書目録簡目』が編まれ、その子部術数類「七雑技術」には「夢占逸旨八巻　明陳士元撰　明嘉靖間刊本」と記されている。このことから、嘉靖本『夢占逸旨』が提要執筆の対象として選定されていたと推測される。「東方文化事業総委員会所蔵図書印」が押印されたのもこの時期であろう。ところが、実際に執筆された『夢占逸旨』の提要は「清嘉慶間刊本」となっており(注27)、続修四庫全書には「抱華東師範大学図書館蔵清嘉慶呉氏聴彝堂刻芸海珠塵本」が収められている。嘉靖本が結果として提要執筆時に参照されなかった理由としては、本書が提要執筆の対象として不適切と見なされた、もしくは提要執筆者が本書を参照することができなかった、もしくは意図的に参照を避けたことなどが考えられる。ただ、現時点において正確なところは不明である。

さて、当時の外交問題および総委員会内部の問題により、続修四庫全書提要の編纂作業は難航し、終戦後には一旦頓挫する。一九四五年には民国政府が派遣した沈兼士によって、東方文化事業総委員会および北京人文科学図書館、上海近代科学図書館を接収する手続きが執られた。翌年には上記二つの図書施設が国民政府から中央研究院歴史語言研究所（史語所）に分与され、図書も史語所に特設された北平図書資料整理処に収蔵される(注28)。

ここで嘉靖本流伝の経緯をまとめてみると、次のような推測が可能となろう。すなわち、一九〇七年に陳毅が偶然発見して購入した嘉靖本は、対モンゴル政策期に起こった蒙古軍による庫倫攻撃（一九二一年）などの動乱に紛れて、陳毅の手を離れた可能性が高い(注29)。その後、続修四庫全書提要執筆事業を推進していた東方文化事業総委員会が嘉靖本を入手すると、本書は北京人文科学図書館に収蔵され、終戦後の一九四六年には史語所に移管

される。しかし、周知の通り史語所は一九四八年に台湾へ移設されたため、嘉靖本もそれに伴って台湾に渡ることになった(注30)。そして一九六〇年に傅図が設立されると、嘉靖本は東方文化事業総委員会旧蔵書来源の善本として傅図に所蔵され現在に至る(注31)。

四、他書との関係および今後の課題

以上、嘉靖本『夢占逸旨』の調査を契機とし、新たに得た情報およびその周辺について僅かながら考察を行ってきた。ここで以下、本稿の冒頭に立ち返り、『夢占類考』や『夢林玄解』など他書との関係からも、『夢占逸旨』受容の一端について考えておきたい。

『夢占逸旨』をはじめとする夢書を時系列に並べると以下のようになるが、『夢占逸旨』の受容という点から見ると、『夢占逸旨』を引く『夢林玄解』の持つ意味は重要である。ただし、『夢林玄解』には二種の版本（明崇禎年間刊と清康熙年間刊）が存在するため、それぞれに載る『夢占逸旨』を、ここでは⑤崇禎本、⑥康熙本としておく。（①～④は再掲）

・嘉靖四十一年（一五六二）刊本『夢占逸旨』（①嘉靖本）
・万暦十一年（一五八三）刊本『帰雲別集』所収『夢占逸旨』（②万暦本）
・万暦十三年（一五八五）刊本『夢占類考』
・崇禎九年（一六三六）刊本『夢林玄解』所収『夢占逸旨』（⑤崇禎本）(注32)
・康熙年間刊本『夢林玄解』所収『夢占逸旨』（⑥康熙本）
・嘉慶年間刊本『芸海珠塵』所収『夢占逸旨』（③嘉慶本）
・道光十三年（一八三三）、『帰雲別集』重刻本所収『夢占逸旨』（④道光本）

本来、『夢占逸旨』は陳士元による本文と陳堦による注釈（割注）から成るが、その情報が明示されているのは①嘉靖本と②万暦本のみである。⑤崇禎本と⑥康熙本になると、『夢林玄解』の編輯者によって注釈部分も陳堦の名も削除され、陳士元による本文のみが引用されている。そして③嘉慶本と④道光本になると、陳堦の名前だけが削除されて、注釈は残されたままになる。そのため、注釈が陳士元の「自注」と誤認される事態が生じる。陳堦の名が削除された理由については不明だが、刻入の過程で削除された可能性が高い。①～⑥のうち、現在最も広く伝わる『夢占逸旨』の版本は③嘉慶本だが、注釈については上述のような経緯があるため注意を要する。

ここで少し『夢林玄解』について触れておきたい。『夢林玄解』は版本毎で編輯者が異なる。明の崇禎年間刊本『夢林玄解』（内閣文庫本）は何棟如らのグループによるもので、本体にそのまま収録されている『夢占逸旨』以外は、ほとんどが何棟如らの創作（捏造）による。清の康熙年間刊本『夢林玄解』（社会科学院本）になると、次は李登なる人物が本書を原本と見せるために何棟如の序文と凡例を巧妙に改竄している。全体の構成についても、崇禎年間刊本『夢林玄解』が「夢原」「夢論」「夢禳」「夢占」とするのに対し、李登は「夢占」「夢禳」「夢原」「夢徵」と改編する(注33)。

また、筆者が『夢林玄解』の各版本に載る『夢占逸旨』を確認したところ、以下の点が明らかとなった。（一）崇禎本（「夢論」に収録）には「應城 養吾陳士元 纂輯」の横に「茂苑 紫水黄夢堂 增補」とあり、『夢占逸旨』が本来三十篇（内篇十、外篇二十）から成るところ二十六篇しか見えないこと。（二）一部の篇名と本文とに改竄の跡が見えること。一方の康熙本（「夢原」に収容）には、崇禎本のような増補の跡は見られないこと。

崇禎本のここまで大胆な増補と改竄は、何棟如の序文に見える「此れ余と紫水氏の裒集して書を成し、陳公の未だ備わらざるを広むるの大指なり」との言葉を裏付けるものであろう。『夢占逸旨』に対して何棟如らが行った増補作業の過程とそこから窺える夢観の変容については今後の課題とするが、少なくとも、陳士元は何棟如らがその完遂を理想とした夢研究における指標的存在として見なされていたと推測する(注34)。

『夢占逸旨』『夢林玄解』という書名が示す通り、これらの夢書は占夢に限定しない、旺盛かつ多角的な夢へのアプローチを特色とする。また、歴代の史書の図書目録という範囲内ではあるが（注4参照）、これを時系列に眺めていけば、占夢書とおぼしき書名が大半を占める状態から、占夢に縛られることなく夢を探索するムードが次第に醸成されていく流れが浮き彫りとなる。

夢の探索という点で言うと、たとえば、夢の根底にあるはたらきを了解する智慧（「通達之智」）を見据える点は『夢林玄解』における一つの特徴であるし(注35)、「夢占」以外の部門も立てる点などは、占夢書の内容のみに夢の理解を委ねず、正しい占夢の方策を説く『夢占逸旨』にも通ずる。その『夢占逸旨』といえば、儒学（道学）を主とする学問的立場から夢と実直に向き合いつつ夢の理論を展開し、実際の占夢においても人道的な夢観に基づき、慎重な態度と人間の徳性を重視するものであった(注36)。

最後に、明代における大部な夢書群の編纂に関しては、それを自然発生的な現象とせず、その現象を強く惹起する要因が存在した可能性について考えることも忘れてはならないと思われる。この点については、夢書群の編纂が『牡丹亭還魂記』等の夢幻文学が隆盛を極めていた頃と時期を同じくするという事実にも目を向けてみる必要がありそうである。当時から傑作と称揚されていた『牡丹亭還魂記』は、「情」の発露が生死や夢現を超越する情至の物語であった。そして、作者の湯顕祖は「情」の対極にあるものとして、是非をただす名教に代表される「理」を置く(注37)。「文虔 晴を祈り、許份 雪を祷り、達奚 雨を請うの夢は、則ち精誠感格し、上下流通す。亦た恒理なるのみ。未だ訝るに足らざるなり」(雷雨)と、道学に拠って夢に普遍的な道理としての意義付けを行い、また占夢の是非を問うた『夢占逸旨』は、まさに「理」の方面から夢を探求したものである。

当時、自由奔放な感情の営みの中に文化の精粋を見い出す時代精神が強く作用した明代において、「夢」は格好の素材であったに違いない。当時優勢を誇ったであろう「情」の夢物語と、一方で伝統的学問に根ざして夢と占夢を探求する「理」の夢研究がほぼ同時期に併存したという点は、明代の夢文化を考える上でも忽視できないと思われる。

注

(1) 齋藤喜代子「中国文学における夢について」(『大東文化大学創立六十周年記念中国学論叢』、一九八四年)

(2) 岩城秀夫「湯顕祖研究」(『中国戯曲演劇研究』、創文社、一九七二年)

(3) 湯浅邦弘「中国古代の夢と占夢」(『島根大学教育学部紀要人文・社会科学』二二―二、一九八八年)

(4) 以下、主な史書の図書目録を列挙すると以下の通り。○『漢書』巻三十芸文志…「黄帝長柳占夢十一巻」「甘徳長柳占夢二十巻」○『隋書』巻三十四経籍志…「占夢書三巻 京房撰」「占夢書一巻 崔元撰」「竭伽仙人占夢書一巻」「占夢書一巻 周宣等撰」「新撰占夢書十七巻 并目録」「夢書十巻」「解夢書二巻」「雑占夢書一巻」「目瞷書各一巻」(梁有師曠占五巻、東方朔占七巻、黄帝太一雑占十巻、和菟鳥鳴書一巻、王喬解鳥語経、嘘書、耳鳴書、目瞷書各一巻、董仲舒請禱図三巻、亡。)○『旧唐書』巻四十七経籍志下…「占夢書二巻 又三巻 周宣撰」○『新唐書』巻五十九芸文志三…「周宣占夢書三巻」「僧紹端神釈応夢書三巻」「詹省遠夢応録一巻」「盧重玄夢書四巻」「柳璨夢雋一巻」「周公解夢書三巻」「王升縮(或無「縮」字)

占夢書十巻」「陳襄校定夢書四巻」○『宋史』巻二百六芸文志五「盧重玄夢書四巻」「柳璨夢雋一巻」「周公解夢書三巻」「王升縮（或無「縮」字）占夢書十巻」「陳襄校定夢書四巻」○『明史』巻九十八芸文志「張幹山古今応驗異夢全書四巻　揚州衛指揮」「陳士元夢占逸旨八巻」「張鳳翼夢占類考」

（5）たとえば、敦煌文書「新周公解夢書」（P.三九〇八）には「仏道音楽章第八」なる章があり、五代宋初における仏教と道教の影響を伺うことができる。ここでは鄭炳林『敦煌写本解夢書校録研究』（民族出版社、二〇〇五年）を参照。

（6）「玄」は避諱であろう。

（7）周亮工は明末清初の蔵書家。「楊升庵、朱鬱儀両先生著書最多、予既合刻其目。此外則陳心叔先生士元。……所著詩文、名帰雲集如干巻外、有論語類考廿巻、孟子雑記四巻、……夢占逸旨八巻、……。板帙浩繁、未易流伝。余旧蔵有六七種、今只存一二矣。後託家呉昉大令覓其全本、亦不可得。」（巻八）楊慎（一四八八～一五五九）については、『明史』に「明世記誦之博、著作之富、推慎為第一。詩文外、雑著至一百余種、并行于世」（巻百九十二）とある。

（8）「拠此、書在国初已不易得、今又歴二百余年、更希罕矣。此集雖缺二三種、較之櫟園所見、実為完帙。道光癸巳、涂氏重刻、但有別集十種、而無外集、不知何故。……今先生論語類考、孟子雑記已刻入陳春湖海楼叢書、夢占逸旨、江漢叢談已刻入呉省蘭芸海珠塵、名疑已刻入張海鵬借月山房叢書、易象鉤解已刻入銭熙祚守山閣叢書、其余他種多刻入近日趙尚輔所編湖北叢書。近六七十年、已家有其書。而求旧刻如此者、已如宣鑪成窯、雖与鼎彝並貴可也。是書曾為南匯呉稷堂侍郎省蘭所蔵、前有印記。」

（9）「先生攬揆之前一夕、夢一老翁冠袍款戸而入、自称斉卿孟軻。翌日而心叔生、其父遂字曰孟卿。後登嘉靖甲辰進士、刺灤州。己酉三月上丁、有事孔廟、分献于孟子、木主無故自仆、型爵皆堕地。心叔悪之、遂自免帰。称養吾子、息影読書。故著書甚富。」

（10）陳士元と東林党との関係についてその詳細は不明である。東林党の領袖であった顧憲成（一五五〇～一六一二）が東林書院を開いたのは一六〇四年からであり、陳士元の在年時期と重ならない。朱倓『明季社党研究』（一九四五年）には、「陳士元、楊建烈、宋師襄、喬承詔、潘雲翼、呉良輔、李喬崙、翁正春、朱大典、陳奇瑜、呉宏業。（乙丑丙寅間、正嚮用、先撥志始列漏網、何得列此。）」と東林党に名前が入ることが疑問視されており、胡鳴盛「陳士元先生年譜」（『国立北平図書館月刊』第三巻第五輯、一九二九年）も東林党関連に言及していないことから、陳士元の名が編入された理由は定かではないが、実際には東林党との関係はほぼないものと推測する。

（11）「『夢占逸旨』における陳士元の夢の思想―「真人無夢」を

めぐって―」（『東方宗教』第百五号、二〇〇五年）、「『夢占逸旨』外篇について」（『待兼山論叢』（哲学篇）第三十八、二〇〇四年）、「陳士元『夢占逸旨』の占夢理論とその構造―『周礼』の占夢法との関係から―」（『中国語中国文化』第五号、二〇〇八年）、「占夢の功罪を問うもの―「感変」からの一考察」（『中国研究集刊』第五十号、二〇一〇年）、「『夢占逸旨』内篇訳注（一～七・了）」（『中国研究集刊』第四十七～五十六号、二〇〇八～二〇一三年）

（12）筆者が二〇一二年に行った調査の際に記録した書誌情報は以下の通り。

〔刊記〕なし〔匡郭〕十三・五cm、白色〔紙型〕縦二十五・二cm、横十六・七cm〔行数〕八葉〔字数〕十九字。（割注十九字）〔版心〕第一冊には「夢旨内篇」、第二冊～第四冊には「夢旨外篇」とある。〔印記〕「士可」「博士泉蔵」「黄陂陳毅」「黄陂陳毅鑑蔵善本」「東方文化事業総委員会所蔵図書印」

一帙四冊。内題、外題、題簽なし。無魚尾、四周単欄。欄外（欄上）に、朱筆、墨筆、藍筆による書き込みあり。装丁しなおされており、裏打ち、裁ち切りあり。四針眼訂法。原型は留めておらず、丸入れ紙か。

〔第一冊〕三十一葉（巻一～二　題記半葉、自序一葉、目録二葉）、〔第二冊〕二十九葉（巻三～四）、〔第三冊〕四十一葉（巻五～六）、〔第四冊〕二十七葉（巻七～八）

（13）光緒十一年（一八八五）重刊本『湖北通志』（中国省志彙編五、京華書局、一九六七年）八十三巻芸文七子部術数類に「夢占逸旨八巻　明陳士元撰」とあり、その注に「案是書嘉靖壬戌士元自序、十篇凡二巻外二十篇六巻并自為之注、南匯呉省蘭刻入芸海珠塵中」とある。

（14）朱志経「張之洞和両湖書院」（『湖北師範学院学報』一九八七年第二期）

（15）船寄俊雄『近代日本中等教師養成論争史論』（学文社、一九八八年）は、一九〇一年十一月、教科書編纂事業に日本での実地調査は不可欠と考えた張之洞が、羅振玉に四、五名を率いて日本への渡航を要請したこと、その際に陳毅も視察団要員の一人に指名されたことについて述べている。（二〇五～二一八頁）その他、呂順長『清末浙江与日本』（上海古籍出版社、二〇〇一年）を参照。

（16）中見立夫「「元朝秘史」渡来のころ―日本における「東洋史学」の開始とヨーロッパ東洋学、清朝「辺疆史地学」との交差―」（東アジア文化交渉研究別冊四、関西大学文化交渉学教育研究拠点ＩＣＩ、二〇〇九年）

（17）王国維は、当時「章程」の起草に陳毅が果たした役割が大きかったことを次のように述べている。「今日之奏定学校章程、草創之者沔阳陳君毅、而南皮張尚書実成之。」（「奏定経学科大学文学科大学書後」一九〇六年、『教育世界』丙午第二期（一

九〇六年二月一一八号）至丙午第三期（一九〇六年二月一一九号）、または『東方雑誌』第六期、一九〇六年）

（18）李毓澍『外蒙古撤治問題』（中央研究員近代研究所、一九六一年）

（19）徐友春主編『民国人物大辞典　増訂版』（河北人民出版社、二〇〇七年）

（20）「吾宗帰雲先生著述宏富、在明代当与升庵並駕、此夢占逸旨特其余事耳。占夢之術雖近迷信、然神意之間何以生此幻象、亦講心理学者至難解決之疑問。此書徴攬宏博、信可供研究之資。暇游廠肆、偶獲此本、故掲其旨趣於簡端、以告学子。光緒丁未十月十六日、博士泉主陳毅識於京寓槐幄軒。此書近惟芸海珠塵有刻本、此本係嘉靖原刊、至為難得、読者当宝惜之。毅又記。黄陂陳毅」

（21）楊鑫輝『心理学通史』第二巻（山東教育出版社、二〇〇〇年）

（22）『心理学通史』第二巻。また、「近世ニアリテモ其初代ニアリテハ猶ホ心理学ト純正哲学トノ混同セシヲ見ル、而シテ其両学ノ判然相分レタルハ極メテ近世ノ事ナリ」（井上円了『訂正増補　心理摘要』、一八九一年）

（23）「日人訳英文之Psychology為心理学。訳英文之Philosophy為哲学。両者範囲、截然不同。雖我輩訳名不必盲従日人、然日人訳此、実頗経意匠、適西文之語源相脗合、未易遽易之也。……Psychology与Ethics（倫理学）皆為Psychology中的一門。吾以為宜立哲学一門、而心理倫理皆入之、似為得体矣。」日本語訳は、桑兵著、村上衛訳「近代「中国哲学」の起源」（石川禎浩、狭間直樹編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開　京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告』、二〇一三年）による。

（24）山根幸夫『東方文化事業の歴史―昭和前期における日中文化交流』（汲古書院、二〇〇五年）

（25）山根氏前掲書。

（26）王雲五『続修四庫全書提要一』（台湾商務印書館、一九七二年）

（27）中国科学院図書館整理『続修四庫全書総目提要（稿本）』（斉魯書社、一九九六年）なお、王雲五が平岡武夫を通じて京都大学人文科学研究所所蔵の提要原稿を出版した『続修四庫全書提要』一～十二（台湾商務院書館、一九七二～）は執筆された提要の一部であるためか、『夢占逸旨』の名は見えない。また、阿部洋（聞き手）「橋川時雄氏インタヴュー記録　東方文化事業総委員会・北京人文科学研究所」（インタヴュー記録E：日中文化摩擦4　特定研究「文化摩擦」、東京大学教養学部国際関係論研究室、一九八一年）

（28）湯蔓媛纂輯『傅斯年圖書館善本古籍題跋輯録』第三冊（中央研究院歴史語言研究所、二〇〇八年）も参照。

（29）「傅圖「善東」書區，編有一、四六四號萬餘冊的古籍，即為

張政烺挑選送南京者，其中大部分係明刊本、明抄本及稿本。該批典籍，多是動亂中由清末藏書家散出者，故卷中有大量之名家手書批語、校記與題跋。」（湯蔓媛纂輯『傅斯年圖書館善本古籍題跋輯録』）

(30) 傅図ホームページには、「民國35年（一九四六）教育部移交接收自日本北平東方研究所為編纂《續修四庫全書》所蒐之善本書一五、〇〇〇餘種、經本所張政烺等人就該批藏書挑出本所館藏未有或具史料價**值**著作一、三〇〇餘種，先運南京整理後遷臺」とある。

(31) 傅図所蔵の善本古籍には複数の来源があり、湯蔓媛氏前掲書および傅図ホームページにその概要が見える。両者が来源として挙げる数や内容はやや相違するが、東方文化事業総委員会旧蔵書を挙げる点は同様である。

(32) 胡鳴盛「陳士元先生年譜」には、嘉靖四十三年（一五六四）に『夢林玄解』成立の項が見える。しかし胡氏が仮託の疑いありとしていること、大平氏も同様の結論を導いていることから、ここでは扱わない。大平桂一「『夢林玄解』の成立　雲なす證言」（『中国文学報』八十二、二〇一二年）を参照。

(33) 大平氏前掲論文。

(34) 大平氏前掲論文。氏は、『夢林玄解』に見える陳士元「夢林玄解小引」は何棟如による偽作であり、『夢占逸旨』全体がそのまま取り込まれた際に陳士元と関連づけられたものと指摘されている。

(35) 清水洋子「『夢林玄解』小考―構成と編集意図―」（『中国語中国文化』第八号、二〇一一年）

(36) 上野洋子「『夢占逸旨』外篇について」（『待兼山論叢　哲学篇』三十八、二〇〇四年）

(37) 根ヶ山徹『明清戯曲演劇史論序説―湯顕祖『牡丹亭還魂記』研究』（創文社、二〇〇一年）